

「戦争と平和！」第 23 回

佐藤 重松



戦争は人類最大の破壊行為 平和と民主主義は一体不可分



当時、私の家族は江戸川に住んで居りました。

1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日深夜轟音を轟かせて 300 余機の B29 戦闘爆撃機が東京に飛来、2 時間余で 33 万発の焼夷弾を無差別に投下、一夜にして 10 万人の命が犠牲に、火傷を負いながら逃げ惑う人々が、熱さのあまり江戸川に身を投じたそうです、明け方力尽きて川面に重なり合うように浮かんでいたそうです。罹災家屋 27 万戸にのぼり焼土と化しました。幸いにして難を逃れられた父親が目当たりにした忌まわしい地獄絵図を、後に語り継いでくれました。

1945 年 8 月 6 日広島に、次いで 9 日長崎に人類の歴史上最も悲惨な原爆が投下され、一瞬のうちに幾十万の尊い命が奪われ、緑豊かな故郷が破壊されました。命が助かった多くの方が被爆者として幾十年の歳月を原爆症に苦しみながら、“三度許すまじ原爆を！”と訴え続け、唯一の被爆国日本が核廃絶の先頭に立って欲しい願いに、政府は未だに背を向けたままです。

♪夏に咲く花 夾竹桃 戦争終えたその日から、母とこどもの願いをこめて 広島の野に咲いている空に太陽が輝くかぎり 告げよう世界に、戦争反対を♪

戦争発端の是非について、時の政治や軍部、財閥がどのような意図を以て開戦に至ったものかは歴史の評価に委ねるとして、確かに言えることは破壊と殺戮のない戦争はあり得ないと云うこと。

その事によって平凡な日常が、家族やコミュニティが、家や建物が破壊され根こそぎ奪われた現実が歴史に深く刻まれたと云うこと。

その反省の上に戦後 75 年間、戦争をしない国として平和憲法の下、新たな歴史を刻んで来たと云うこと。

平和の礎を堅固なものにするのは民主主義を土台

とし、基本的人権・自由権・平等権或は多数決原理・法治主義などが正しく機能してなければなりません。

フランスの政治思想家モンテスキューは「法の精神」で“全ての権力者は権力を濫用しがちであり、それを抑制するためには、他の権力によって権力を監視・牽制する”と説いています。

立法・行政・司法、が独立し三権分立機能を發揮、また、健全なジャーナリズムが、ファクト報道に徹し国民のリテラシー向上を促し、正しく物事の清濁や是非の判断が出来る情報の提供が重要です。果たして日本のジャーナリズムは権力に対し如何に？

しかし、残念ながら日本の政治は現内閣（政官）に於いて民主主義を蹂躪する姿勢が、国会運営に如実に現れています。公文書改竄、捏造、廃棄、モリ・カケ問題をはじめ、桜を見る会私物化問題、或は前法務大臣夫妻の選挙買収疑惑、カジノ疑惑等々枚挙に暇がないほどの不正が露見、疑惑解明に蓋をして、世界中がコロナ禍のなかで、日本の国会は早々に閉会。野党が 4 分の 1 以上を以て国会法 53 条に基づき早急に国会を開く求めに、頑なに応じない姿勢は何によるものか、邪な政治運営の極みと云う他ありません。

日本はこの数年の間に、様々な指標の国際比較に於いて著しく劣化の道を歩んでいます。

報道の自由度 2016 年 72 位、民主主義度は 23 位で先進国中最下位、幸福度 53 位、男女格差に至っては 101 位です。

歴史は「正義の原理」を貫けない権力者の姿勢は、やがてファシズムへの道に繋がるものだ。と教えています。現在、日本はその瀬戸際に立っているように思えてなりません。